

U
S

作・大信おのおのぶペリカン

【梗概】

作… 大信ペリカン

冒頭、主人公のナミが独り言ちている。彼女の周りに鬼火がちらついている。

さてこれは、彼女の思い出を深く旅する夢幻・ロード劇である。

ヨミ市は架空の町だ。その海辺の小さな町はかつて企業城下町として栄えた。その頃、町には同じ企業の関係者や家族が住み、町民は一つの家族のように暮らしていた。魚屋があり、飲み屋街があり、神社があり、漁港がある、かつてどこにでもあったような、そして今はあまり見かけなくなった町だ。

ナミの夫がある日突然失踪したという。彼女はふと思い立ちヨミ市を訪れた。そこは彼女の夫の生まれ故郷で、勘のいいナミは夫がそこにいるに違いないと感じたのだ。久しぶりに訪れた町はすっかり姿を変えていた。彼女は宿をとった旅館の女将であるハマがやっているという市民劇への出演を勧誘される。ナミは昔女優をしていた。

ナミは劇団員が稽古をしている海辺の広場まで連れられる。劇は即興劇で、明日その場所で開かれるお祭りで上演されるのだという。劇団員は、そのお祭りはその町の者なら誰もが訪れるもので、ナミの夫がこの町にいれば必ず来るに違いないとナミに話す。

劇団員のメンバーは、ハマのほか、ミズ、ヨウ、そしてシオという少年だ。

即興劇の経験がないナミは出演を断るが、強引に劇の稽古は始まる。稽古の導入にあたりナミは劇団員から「何があっても否定しない」という即興劇のルールを教わる。

その劇は町に古くから伝わる昔話を題材にしているのだという。海で亡くなった三人姉弟の次女を探して、長女と末の弟、近所のヤマモトさんが「くらいところ」まで会いに行くという筋立てとなっている。

ナミは「偶然その町を訪れた人」として稽古に参加する。劇中の登場人物にはナギサという名の少年がいた。ナギサはいなくなった彼女の夫と同じ名だ。彼から不思議な言葉をかけられたことをきっかけにナミは過去を思い出す。それは夫と初めてこの町を訪れた際に買った魚屋の記憶で、その魚屋には夫の同級生である娘がいて、どうやらその娘が夫のことが好きらしいということを知った経験だ。そこでナミは夫が昔、その町を出る際に一冊のノートを作ったという話を聞く。

記憶から覚めたナミは驚いた。強引に押し切られ始まった劇の稽古に参加していたはずが、なぜか広場で劇の勧誘を受けている時間に戻っていたのだ。そうしてまた強引に劇中劇の稽古が始まる。「くらいところ」へ行った姉弟とナミはそこで死んだ姉と会う。長女は帰ろうと誘うが、死んだ姉はその火で炊いた食べ物をお口にしたら帰れないので、代わりに玉手箱を渡すと言う。その玉手箱があればいつでも「くらいところ」の入り口で彼女らは再会できるらしいが、決してそれを開けてはならないと死んだ姉は釘を刺す。ただ、その玉手箱は確かにナミが持っていたトランクだ。

ナミはまた記憶の回廊に迷い込む。もはやそれはナミの記憶なのかどうかも定かでない。

その町に昔いたという「記憶売りのチャボン」と呼ばれる女との会話だ。チャボンが提示した記憶はナミの夫が子供の頃に経験したものだ。チャボンは言う、「あなたの旦那様の記憶は、今や完全に物となったので、わたしが取扱える」と。それを聞いてナミは夫が死んでしまったのではないかと感じる。

我に戻ったナミはまたもや時間を遡り、劇の世界に巻き込まれる。劇世界で長女は死んだ姉から受け取ったトランクを開けようとする。長女は死んだ姉を忘れ、これからの人生を生きようとしたのだ。死んだ姉からの忠告を大切にするヤマモトさんがそれを止めようとしたため、二人は言い争い、トランクの奪い合いとなる。二人の主張を押し付けられたナミは興奮し叫んだ。「これは、わたしのトランク！」

そしてナミは時間を遡る。ナミは旅館に着いたばかりだ。女将がナミのトランクを預かるうとするが、ナミはそれを取られると思ひ、必死に抵抗する。二人がトランクを引っ張り合ったので、トランクの留め具が外れ、中の物が地面に落ちる。

中に入っていたものは喪服などお葬式の準備と、夫の思い出の品だった。ナミはもはや全ての記憶を取り戻している。彼女の夫は行方不明になったのではなく、死んだのだ。トランクの中身は夫のお棺に入れようとナミが準備したもので、夫が生まれ故郷を出る際に記したというノートだった。

さて、ナミは自宅で独り言ちている。彼女の周りを鬼火がちらついている。そこに、ナギサの形をした夫が現れ彼女に話しかける。彼は言った。「ナミ、見てごらん。・・・朝日。もうじき明るくなる。」

二人を朝日が包み、夫は去る。ナミ一人取り残されて、劇は終わる。

登場人物

ナミ（六二） 失踪した夫を探す

ハマ（四〇） 旅館の女将

ミズ（三五） 劇団員

ヨウ（二二） 劇団員

シオ（一二） 劇団員 少年

姉 劇中劇の登場人物

ナギサ 劇中劇の登場人物

死んだ姉 劇中劇の登場人物

ヤマモト 劇中劇の登場人物

魚屋の娘 かつてその町にあった魚屋の娘

チャポン かつてその町で記憶を売っていた女

開演と同時に呼子笛の音長く。
笛が止むと物が落ちるような音。明るくなる。
驚いた顔をしたナミが止まっている。手に持ったカバンの留め具が外れたせいで中身がぶちまけられている。

ナミ・・・ああ、そうか。

音楽。

どこかで花が散ったのだろう、花びらがひらひらと舞い降りた。
ナギサという名の少年が現れ、すでに地に落ちてしまった花びらを眺める。

舞台は白い円形に区切られている。その端に、大量の花に飾られた、船のような、棺のような、パレードのフロートのフロートが置かれている。

ナミがいるそこはどこだろうか、電灯のペンダントが一つ下がっている。それは鬼火のようにも見える。

フロートの付近にパレードの一人が現れ、ナギサを招く。

ナミが次のセリフを話す間、パレードの人々はナミに近寄り、こぼれ落ちた荷物をカバンに詰め直す。

波の音が聞こえる。

ナミ（若々しい風情を演じて）ねえ、・・・おとうさん。・・・なに驚いた顔して。いいじゃない。いつかあなただつて本当のお父さんになるんだから、その練習だと思えば。・・・「おとうさん」の声を聞いている）ねえ、子供が生まれたら、名前は海にちなんでつけましょう。洋太、洋子（ひろこ）、海（かい）、岬、満（みちる）、タラオ、イクラ、（笑って）そうサザエさん。・・・ここ、いい町ね。夜を抜けて、よけい新鮮に思える。・・・いい町。・・・あなたの生まれた町。・・・え？ 何？ ・・・何を見るの？ ・・・あれ？（途端初老のナミに戻り）・・・おとうさん？

一瞬にしてそこはナミの夫の故郷、ヨミ市の駅前にある小さな旅館となる。

パレードの人々の一人が女将となる。

初秋。夕刻。

女将 いらつしやいませ。

柱時計の大きな鐘の音が五回鳴る。

女将 あら動いた。

ナミ・・・え？

女将 時計。しばらく止まってただけど。・・・壊れてるのよ。

ナミ ……よろしく願います。

女将 迷ったんじゃないやありません？ ここ、はいり口わかりにくいんですよ。

ナミ 駅の観光案内所の方がいい人で、ここまで案内してくれたんです。

女将 そうですか、それはそれは。

ナミ 断ったんですけど近くだからって。

女将 よっぽど目立たないと思われてるのね。まあどうぞどうぞ。いやでも突然お泊りになりたいなんて聞いてびっくりしちゃいましたよ。

ナミ ……すみません。えっと……、

女将 まあこっちはもうそれが商売ですからありがたい話だけど。ただ案内所の人に聞いたと思いますけどご飯は用意がなくて。

ナミ ええ、知ってます。それに、もう、それは、すませて……。こちらが前もって予約の電話を入れればよかったですけど、わたしもちよっと、なんだか……、

女将 (ため息) いいのいいの。近頃のシティホテルやなんかじゃそういうものなんですよ？ うちも同じ。ご希望があつて、お部屋があればお泊めするし、空いてなければお断りする。

ナミ 本当にすみません。ご無理を、

女将 いや、それはこっちがちゃんとしとかなきゃいけないだけだね、もうアレコレ手が回らなくて申し訳ない限り。ひなびた古い旅館ですが愛情込めてやってますから、もうそれだけを味わうつもりでごゆっくりしてってください。こちら(トランク)お預かりしますね。

ナミ (反射的にそれを拒む)

またもや時計の鐘が鳴る。こんどは二回鳴る。

女将 (時計に気を取られ) あらまた……。 (ナミに) なんですか。

ナミ いや、えっと……。大切なものなので。

女将 ……取りやしませんよ。

ナミ すみません。

女将 お預かりしますね……。さ、どうぞどうぞ。

ナミ あ、えっと……、

女将 ああ。靴のままどうぞお入りください。

ナミ お邪魔します。

女将 ……お客さんは、釣りするわけじゃ……。、

ナミ (聞かれていることの意味がわからず)……。ええ、釣りは全く……。、
女将 (聞かれていることの意味がわからず)……。ええ、釣りは全く……。、
ナミ ……(ナミをまじまじと見て) そう。あそこが食堂です。朝はね、六時から食事できるようにしてあります。もっと早い時間がご希望なら、そのときはおっしゃってください。

ナミ はい。

女将 お風呂は食堂の脇をずっと進んで突きあたり。左側が女湯だから。夜はね、十時半まで、朝は申し訳ないけどやってないの。昼は十五時には入れるようにしてあります。ほらウチ、場所柄釣りのお客様が多いから。あの人たち朝は早いウチにもう出ちゃうでしょ？

ナミ (先ほどの質問を理解して) あ。．．．そうですね。ここは釣り客の方が多いんですね。(周りをキョロキョロ眺める)。

女将 ．．．そうねえ。ここ最近はどう釣りのお客様がほとんどよね。モモギ電子があったころはねえ、お仕事のお客様もずいぶんお泊めしたけど。

ナミ モモギ電子．．．。
女将 大きな工場があったのよ。自動車の電子部品？ そういうのを作ってたらしいんだけど。ところがイチハラの工場と統合されちゃってねえ。あたしの同級生なんか何人か、そこで働いてたんだけど、社員だった人はだいたい新工場の方に引っ越しちゃったわね。それからここもずいぶん静かな町になっちゃった。

ナミ モモギ電子。

女将 そう。

ナミ それって、海の方に社宅がありませんでした？

女将 あら、ご存じなの？

ナミ 夫のお父さんが勤めてたんです。

女将 あら、モモギに？

ナミ ずいぶん前なので。退職して．．．、今はもう他界しました。退職までその社宅に住んで、

女将 そうなのお。あなたそういう方だったの(嬉しそう)。もう今そこは公園になっちゃってね。すっかり変わっちゃったわよ。．．．そうなの、ここにゆかりの方だったのね。それでこの町にいらっしゃったの？

ナミ え？

女将 こんな何もないところに女の方一人でいらっしゃるなんて。しかも突然泊りたいたななんて、どういう方なんだろうって思ってたのよ。今日はどなたかご親戚でも訪ねてらっしゃったの？ それともご法事かなにか？

ナミ いえ、親戚は．．．、誰も住んでませんし、法事でも．．．、

女将 ．．．お墓参り？

ナミ ．．．いえ、．．．そうではないんです。

女将 ．．．後からご主人がいらっしゃるの？

ナミ 主人ですか？

女将 仕事終わったら駆けつけるとか、

ナミ いえ、．．．わたし一人で。

女将 ．．．一人で。

ナミ ．．．はい。

女将 ．．．案内所の方がここまで送ってきたのもうなずけるわね。

ナミ え？

女将 なんか危なっかしいわよあなた。

ナミ ．．．危なっかしい？

女将 ．．．なんかあった？

ナミ いえ。別に。

女将 ．．．そう。

ナミ なにもありません。

女将　じゃあ何しに来たの？
ナミ　それは……。

間。

女将　……あたしでよかったらさ……。

ナミ　はい？

女将　話してみる？　……どうせこの先二度と会わないでしょわたし達。旅の恥はかきす
てでさあ。

ナミ　……夫が、……ある日突然いなくなったんです。

女将　……どのくらい。

ナミ　一週間。

女将　……女？

ナミ　わからないですけど、

女将　けど？

ナミ　違うと思います。

女将　そう。それでダンナの故郷に来た……、

ナミ　はい。

女将　どうして。

ナミ　……なんか、ここにいそうな、……そんな気が……（困り果てて笑うしかない）、

女将　そう。

ナミ　……はい。

女将　いつまでいるつもり？

ナミ　特に決めては来なかったんですけど、この週末は特に予定もないので……、

女将　……お客さん。お名前はなんとおっしゃるの？

ナミ　イザワです。イザワチナミ。

女将　チナミさん……あのね、この後なんだけどね。ちよつとわたし用があつて出ちやう
んですよ。留守の間は姉が来てくれるので心配はいらないんですけど。

ナミ　はい。

女将　すみませんねえ、……大丈夫？

ナミ　はい。大丈夫です。

女将　本当に？

ナミ　なにがですか？

女将　本当に大丈夫？　あ、いや。なんかあたし心配で、ほら、自分で言っちゃあおしまい
だけど、こんな古臭い旅館に一人でいたらねえ……ただでさえねえ……気持ち
がねえ……沈むのにねえ、

ナミ　自殺したくなっちゃいますか。

女将　そんな！　わたしそんなこと言ってるんじゃないのよ。そんなことある訳ないじゃな
い。ある訳ないと思ってるわよ。ある訳ないと思うけど、自分で言っちゃあおしまい
だけど、こんな古臭い旅館に一人でいたら、ある訳ないことだってあることもありう
る訳じゃない？　自分で言っちゃあおしまいだけど、こんな古臭い旅館に一人でいた

ら、ありうるものがあっちゃつたらそりやもう、そのときは、そのときで、そのとき
なんだけど……、

間。ナミが思わず笑い出す。打ち解けたように笑いあう二人。

女将 ……ちよつとそういうことも考えたわ。

ナミ 大丈夫です本当に。わたしそんなつもりもありませんから。

女将 ……そう？ 悪いわね本当に。

ナミ お仕事ですか？

女将 いや。お仕事という訳ではなくてね。……お稽古なのよ。

ナミ お稽古って、……三味線かなにか。

女将 三味線って……、芸者じゃないんだから。まあでも似たようなもんか。お芝居なの。

ナミ お芝居？

女将 そうなの。わたし市民劇団やってるのよ。市民劇団って言ってもほんの小さいやつよ。
気の合う仲間ですってほんのお遊び。

ナミ お芝居って演劇ですか？

女将 そうなの。

ナミ どんな演劇を？

女将 ……この町に伝わる昔話をね、テーマにしてるんだけど。

ナミ 女将さんが台本書かれたんですか？

女将 いや、みんなだね。作ってるんだけど。

ナミ へえ。

女将 ずいぶん積極的。……興味あるの？

ナミ わたし、昔演劇やってたんです。

女将 あら。

ナミ それで、つい懐かしくなっちゃって。

女将 わたし達みたいにして市民劇団かなにか？

ナミ ……一応、……プロというか。……劇団の研究所を出て、何年か続けたんですけ
ど、主人と結婚した時にやめてしまつて。

女将 なんですしょ。それはそれは。……女優さん。……そうですか。

ナミ ずいぶん昔の話です。

女将 ……よかつたら見に来ませんか？

ナミ わたしですか？

女将 せっかくだからいらつしやいよ。みんなにも紹介したいわ。

ミズ、ヨウ、シオが出てきて輪になって立つ。

ミズは鍵盤ハーモニカを、ヨウはリコーダーを持っている。

ナミ いやでも、

女将 いいじゃないの。

ナミ だって、

女将 いいからいいから。
ナミ そんなに心配ですか？

女将 なに？

ナミ わたしを一人にするの。

女将 いや……。まあそれもそうだけど……。実はね、

ヨウがリコーダーを吹き始める。のどかなメロディー。

女将 私たちのお芝居に出る予定の人が……。突然出られなくなっちゃって。

ナミ あら。

女将 困ってたのよ。

ナミ はい。

女将 こんなこと急に見ず知らずのあなたに言っただけ……。よかつたら代わり
に出てもらえない？

ナミ そんな……。ムリです。

女将 だって……。ほらあ、ねえ？

ナミ 昔のことです。

女将 来るだけでも……。おねがい。

ナミ そんなこと言ったって、お芝居の日までここにいるわけにも、

女将 その点は心配いらないの。

ナミ どういうことですか？

女将 ……本番は明日なの。

ナミ ……ムリですよ。

ヨウのリコーダーにミズの鍵盤ハモニカと、女将とシオの歌が加わって演奏が
始まる。

と、そこは海辺の公園。

もう日は暮れている。外灯に照らされた広場。

「あめあがり」

あめあがり みずたまりは

かがみ みたい

あめあがり みずたまりに

くじら もようの

そらが うつつた

演奏が一時ブレイクする。

波音。

ナミ 真っ暗……。あんなに真っ暗なところ、一体どうなってるんだろう……。そうか。

海が潜んでるんだ。

演奏が再開する。

波音は止む。

あめあがり みずたまり
あめあがり くじら

みずたまりの なかを もぐって
ちきゅうのうらまで つれてけ

歌い終わると、ミズ、ヨウ、シオが一斉にナミの方を向く。

ミズ ハマさん。・・・見つかったんですか？

女将はハマと呼ばれていた。

ハマ チナミさん。うちのお客様なんだけどね。昔お芝居やってたんですって。女優さん。
ミズ まあ（ヨウ、シオと顔を見合わせて喜ぶ）。

ナミ 違います。（ハマに）あの、わたし本当に・・・、

ハマ こちらミズキちゃん。
ミズ ミズキです。

ハマ みんなはねえ、ミズって呼んでるのよ。・・・ヨウコちゃん。

ヨウ ヨウコなので、ヨウって呼ばれてます。よろしくお願いします。

ナミ はぁ・・・。

ハマ あ、そうそうわたしはハマ。シヨウジハマコっていうのよ。往年の銀幕スターみたいでしょ。名ばかり大女優。やんなっちゃう。というわけでわたしはハマコでハマ。それでこの子がトシオくん。ニックネームは、シオ。

ナミ ・・・・トシじゃないんですね。

ヨウ ほら、ごあいさつして。

シオ ・・・・こんばんは。

ナミ こんばんは・・・。

ハマ ヨウちゃんの弟さん。これがメンバーね。

ミズ じゃあ、早速ですけど説明します、

ナミ あの、何度も言いましたけど、・・・ムリなんです。わたしが舞台に出てたのなんかもうずいぶん昔の話ですし。それに、・・・本番だってその・・・、

ミズ 明日です。

ナミ 絶対間に合いません。

ハマ ・・・・ところがその点も心配いらぬの。

ナミ はい？

ハマ わたし達ね、即興劇やるのよ。（ヨウに）ね？

ナミ ……即興劇？

ヨウ この町に古くから伝わる物語を題材にしてるんですけど、偶然この町にやってきた女の人が、町の人に連れられて旅をするお話なんですよ。

ナミ ……はい。

ヨウ お話はわたし達が進めるから、ただ、流れに乗ってついてきてくれたらそれで…
簡単でしょ？

ナミ 簡単じゃないでしょ…わたしセリフのあるお芝居しかやったことないです、即興劇なんかとんでもない。

ミズ やってほしいのは、その偶然やってきた女の人の役。

ハマ ね？ ちよūdあなたそのまんまでしょ？ ……できるわよ。

ナミ できませんって。それにわたしだって…ヒマじゃないんだから。明日だってやる
ことがあるし…、

ハマ ……やること？

ナミ ……それは…、

ミズ ……(ハマに) お仕事で来た方？

ナミ いや、仕事ではないんですけど…、ちよつと、いろいろあつて…。

ミズ (ハマに) どういう人？

ハマ ちよつとね。

ナミ ……夫を探してまして。

ミズ ダンナさん？

ナミ 一週間ほど前から帰ってなくて…、ここ、夫の生まれ故郷なんですけど、もしかしたらここにいるんじゃないかって、

ミズ どんな人？

ナミ 身長は一七五センチくらいで、細身です。黒縁のメガネをかけてる…、

ミズ どうしてここに？

ナミ どうして…、

ハマ ……それはよく分からないのよね。

ヨウ ……女の勘？

ナミ そうかもしれない。弾かれたみたいにそう思って、気付いたらこの町に来ました。

ヨウ はい。(と手を挙げ) それ、当たってると思う…ダンナさんこの町にいます。

ナミ え？

ハマ ……見たの？

ヨウ そうじゃなくて女の勘。チナミさんの女の勘が当たってるっていうわたしの女の勘が
こう、

ハマ なにそれ。見たのかと思った。

ヨウ だってそう思ったから。

ハマ 勘が当たってる勘なんて、全然アテになりそうにないじゃない。

ヨウ そうかなあ…。

ミズ ……女？

ハマ やつぱりそう思うでしょ？ でも違うみたいなの。

ミズ じゃあ借金とか、

ナミ ……それはないです。
ミズ 仕事。……病気。

ナミ ……それも。

ミズ ……そう。

ヨウ やだ。(手を挙げて)……誘拐。

ミズ ……はあ？

ナミ 夫は五八歳なの。

ヨウ (真面目に) いやいや、大人だって誘拐されるから。テロ組織とか。

ミズ ちよつとあんた黙ってて。

ヨウ あるんだって。

ミズ ないから。

ヨウ ネットで見たもん。

ミズ それ外国の話でしょ！

ナミ ……そういう事件性とかも考えられなくて…。だから…。手がかりがあるわけじゃないけど、明日はこの町を探してみようと思うんです。夫が生まれた社宅とか…。なにか思い出がありそうなところを回ってみたいんです。

ハマ その社宅ね、(と言いかけたところで)

ヨウ はい。(手を挙げる)

ハマ ……もう言わない方がいいんじゃない？

ヨウ え？ なんでよ。

ミズ あんたさつきから変な事ばかり。

ヨウ 違うの。…ダンナさんがこの町にいるとしたら、明日観に来るじゃないですか。

ハマ、ミズが「あっ」と何かに気づいた様子。

ミズ ……あんた(ヨウ)、それ、ある。

ハマ あるね。

ヨウ ……でしょ？

ナミ ……どういうことですか？

ハマ 明日はね、お祭りなの。わたし達のお芝居もそのお祭りでお上演するんだけど、

ナミ はい。

ヨウ みんな見にくるんです。…この町の人がとっても楽しみにしてるお祭り、小中学生は授業で来るし、高校生は友達と来るし、親も来る。大人達も仲間同士で来るし、夫婦で来るし、家族で来る。とにかく、町中の人があるお祭り。…だからあなたのダンナさんがもしこの町にいたとしたら、絶対ここに来ると思うんです。

いつのまにか、波音が辺りを静かに包んでいる。

ナミ ……ここ？

ミズ お祭りはここでやるのよ。波の音が聞こえる公園。波の音が聞こえる広場。お芝居もここでやるの。波の音が聞こえるステージ…。

劇団員たちはナミを大きく囲むように立っている。

ナミは確かめるように数歩歩く。

辺りを鬼火がさ迷っている。

シオが鬼火に触れると、それはユラユラと揺れた。

ハマ ダンナさんが生まれた社宅・・・

ナミ ええ。

ハマ ここよ。

ナミ え？

ハマ モモギ電子の社宅。今はもうすっかり変わっちゃって、公園になってる。・・・ずいぶん変わったでしょ？

ナミ あの暗闇は、海ですね？

ハマ そう、ここは、波の音が聞こえる公園。波の音が聞こえる広場。

ナミ ・・・(海を見ながら) 真つ暗な闇かと思っただけど、明かりがありますね、点々と。

ハマ 見える？

ナミ あれは？ なにかの漁ですか？

ハマ あれは鬼火。

ナミ え。

ハマ 死んだ人々の魂。ああして朝まで灯ってる。

ナミ 朝。

ハマ 魂は夜の間だけちらつくの。

ナミ ・・・でも、今、何か・・・、音が、

ハマ 音？

ナミ 汽笛みたいなの。やっぱりあれは船でしょ。

ハマ 姿の見えない船が進んでいくのね。どこかの水平線を目指す、姿のない船が。

ナミ ・・・(汽笛の音を真似て) ボー・・・ボー。

ハマ 独りぼっちで進んでいくの。

鬼火は姿を消す。

ナミ ・・・不思議なことを思い出しました。初めて夫の実家に来た時・・・わたしなぜか魚屋さんにお買い物に行っただけです。多分夕飯の支度をしていて、お母さんが手が離せないかなにかでわたしが。おかしい魚屋だったんです。魚屋というよりは何でも屋みたいな。カレールーに、クレンザーに、洗面器にメリット・・・。変わった名前娘さんがやってる変わったお店で。

波の音大きくなり、消える。

ハマ、ミズ、ヨウがいつの間にかいなくなっており、つまりはシオだけが残っているのだが、実はそこにいるのはシオではなくナギサという名の少年だ。

が、無論ナミはそれを知らない。

ナミ あれ？（あたりを見回し）・・・シオくん。みんなは？

ナギサ・・・出てよ。

ナミ・・・え。

ナギサ 女優さんでしょ？

ナミ それは昔の話。

ナギサ 嫌いになった？

ナミ え？・・・（少し考えて）ううん。おばさんのダンナさんがね、やめてって言ったの。

ナギサ・・・ひどいね。

ナミ ひどい？

ナギサ していなくなっちゃうしね。ひどいね。

ナミ だからいなくなっちゃった訳じゃないのよ・・・でも、そうかもね・・・ひどいよね・・・わたしばかりこんな、心配して、探し回って・・・

ナギサ あれ？

ナミ どうかしたの？

ナギサ・・・今なにか言いたくなっただけ・・・

ナミ うん。

ナギサ・・・わすれた。

ナギサがポケットから呼子笛を出し、海の方に向かって長くそれを吹くと、いなくなつた。

波音が再び聞こえる。

ナミ え？ ちよつと・・・シオくん！

劇が始まった。

姉が現れる。姉はハマが演じている。

波音は消える。

姉 即興劇のルールを知ってますか？

ナミ え？

姉 ルール、即興劇の。

ナミ いえ・・・、

姉 相手を否定しないこと。なにがあっても。さあ、はじめましょう。

ナミ ちよつと待ってください、わたしできません。

姉 当事者意識を持つ。責任を持たなきゃダメ。劇を作るのは他ならぬあなたであり、わたし・・・。

ナミ・・・。

姉 笛の音を聞きましたか？

ナミ え？

姉 笛の音です。聞いたでしょう？

ナミ ……はい。
姉 わたしもです。……あなた、見ない顔ですが、この町の人では……、
ナミ ……ええ。
姉 どこからいらつしやったんですか？
ナミ ……ここからはずいぶん遠い町です。
姉 どれくらい？
ナミ ……電車に乗って、……四時間くらい。
姉 ……そこはどんなところですか？
ナミ ……ここと同じように静かで、やはり海があります。
姉 ……ここにはなぜ？
ナミ ……この町はわたしの夫が生まれたところで、
姉 ……そうですか。
ナミ ……でも来たのは本当に久しぶりです。この辺りはずいぶん変わっちゃいましたね。
姉 ……そうするうちに、笛の音が聞こえたんですね。
ナミ ……ええ。
姉 ……それは、この町の少年の仕業です。
ナミ ……少年？
姉 ……ええ。その子には年の離れた二人の姉がいるのですが、もう三ヶ月になりますが、その片方が海で死にましてね。それ以来、あの子は毎日夜になるとここに來て笛を吹くのです。皆がやめると言っても聞きません。

別の空間に、ナギサが現れる。

ナギサは呼子笛を吹く。

ナミはそれを見る。

死んだ姉の声が聞こえる。

死んだ姉の声 ナギサ、
ナギサ え？
ナミ 渚？
死んだ姉の声 ……ナギサ、
ナギサ しー姉ちゃん？
死んだ姉の声 こっちよ、こっちにきて。
ナギサ どこ？
死んだ姉の声 こっち。
ナギサ どこ？
死んだ姉の声 この道。……この道を通って……、
ナギサ 通って、どこにいくの？
死んだ姉の声 「くらいところ」
ナギサ しー姉ちゃん？

ナギサは声の方に真っ直ぐ進んで消える。

姉 そちらに何か見えるんですか？

ナミ あ、いえ・・・、えっと、でもどうして笛を？

姉 誰かが船から落ちたり、船がひっくり返ったり、身投げをした時など、夜、海に沈んだ人を探すとき笛を吹いて探すのです。あなたの町でもそうではありませんか？

ナミ 笛ですか？

姉 助けるものは皆笛を吹きます。力強く吹いた笛の音は、波の音に消されることなく遠くまで響きますから。

ナミ わたしはその、海にはそれほど詳しくなくて。わたしの今住んでる町でもそうなんですかね。

姉 少なくともこの町ではそうです。

ナミ それでその子も、

姉 まだ小さいので死ぬという意味がわからないのでしょうか。いつまでたっても彼は笛を吹くのをやめないのです。叩いてもやめません。

ナミ 叩く？

姉 正しいことを教育するためです。この世には二度と戻らぬ別れがある。それは正しいことですから。そうでしょうか？

ナミ ええ、まあ。

姉 正しいことを教えるのはいけないことですか？

ナミ ・・・・あなたはその子の先生かなにか・・・、

姉 いけないことですか？

ナミ ・・・・いいえ。

姉 わたしはあの子の姉です・・・。

ナミ ではその亡くなった人というのは、

姉 わたしの妹でした。

ナミ それは・・・、

姉 ・・・・。

ナミ あなた・・・、

姉 私たちには両親がおりませんので、わたし達姉妹と弟は三人で力を合わせて暮らしていました。(海を見て) 妹はずいぶん急いで両親に会いに行きました。

ナミ まさか・・・、

姉 为什么呢？

ナミ あなたのご両親も海で・・・、

姉 勘のいい方ですね、あなたは。

ナミ ・・・・そうかもしれません。

姉 でもまあ、この町の人は多くが海で死にます。

ナミ そうなんですか？

姉 珍しいことではないんです。この町はずっと昔から海と共に歩んできました。海が富めば町は栄え、海が貧しいと町は寂れたのです。ここでは幸も不幸も全てが海と共に

ナミ あります。

ナミ すみません、

姉 どうしたんです？
ナミ わたし、あなたに辛いことばかり・・・、
姉 両親が死んでからはずいぶん時間が経ちました、妹のことも時がゆつくりと良くしてくれるのでしょうか。こうしてあなたと話すことも、供養になります。

と、そこにミズ演じるヤマモトさんの声。

ヤマモト 待ちなさい！

シオ演じるナギサが駆け込んでくる。すぐ後をヤマモトが追いかける。

姉 ナギサ！・・・ちよつとどうしたんですか。

ヤマモト (息を切らして、姉に)お姉ちゃん、ちゃんと見てないとダメじゃないの！・・・

この子・・・海に入ろうとして、

姉 え！ 本当ですか、

ヤマモト あたしが止めなかったら今頃どうなってたことか。(ナギサに)落ちたら死んじやうのよ！

姉 あんた・・・、なにやってるの！

ナギサ・・・はいらぬ。

姉 だってヤマモトさんそう言ってるじゃない。

ナギサ うそだよ。

姉 なに言ってるの！

ヤマモト そういふんです、この子。僕は道を歩いてきたって。しー姉ちゃんが呼ぶから、道を歩いてきたって。でも、そこに道なんかありません。この子海に向かって・・・。

わたしが見つけなかったらあんた海に落ちてたのよ。

ナギサ・・・みんなは、死んだらそれで終わりだと思ってるからそんなこと言うんですよ。

姉 (ナギサを叩く)なにを言ってるの！・・・どうしてあなたはわからないの！(叩く)・・・あなたは何度言っても(叩く)、ちつとも聞かないで(叩く)、・・・笛を

(叩く)、吹いたりして(叩く)、・・・いつまでも(叩く)、いつまでも(叩く)、いつまでもこの子は(逃げるナギサを追いかけて何度も叩く)

ナミ (それがあまりに度を越しているため、姉を制して)ちよつと、ちよつと！ やめな

さい、ストップ！・・・一回止めて！

姉 (叩くの止め)・・・なに？

ナミ・・・あ！ ごめんなさい、勝手に止めて・・・でも、本気で叩いてるじゃないですか。ちよつと、あんまりかと思つて。

姉 本気で叩くに決まってるでしょ。この子は命を粗末にしたのよ。

ナミ でもこれ。やりすぎじゃないですか？ いくらなんでも、子供に。

姉 あなたが叩いてもいいって言ったから。

ナギサがナミの方を驚いた顔で見る。

ナミ ……わたしが？

姉 正しいことを教えるのはいけないことじゃないって、言ったじゃないの。

ナミ ……いや、それは、

姉 あなたの言うことは分かります。口で言えばいいって言うんでしょ？

ナミ そうじゃなくて、わたしが言ったのはお芝居の話で、

姉 わたし口で何度も言ったんです。何度も何度も。それでもこの子は笛を吹くのを止めないの。何度も言っただけで、言っただけで、それでもやめないから叩くんです。それも、叩いても、何度も叩いても止めないんです、この子は。

ナミ ……。

姉 どうすればいいの？ ねえ！

ナミ いや、わたしそういう意味で。

姉 どうすればこの子に本当のことを教えてあげられるのよ！

ナミ ……ハマさん？

ヤマト あなたが叩いてあげたら。

ナミ え？

ヤマト お姉ちゃん、そうじゃない？ お姉ちゃんは兄弟だからこの子、甘えて言うこと

聞かないのよ。あなたが叩いてあげなさいよ。

ナミ なに言ってるんですか。

ヤマト 見ず知らずのあなたに叩かれたら、この子だって相当こたえるんじゃないかしら。

ナミ いい加減にしてください。

ヤマト ね。叩いてあげて。

ナミ いやです。

ヤマト この子のことを思ってやるのよ。(ナギサに) ねえ、あなただって知らない人から

叩かれたらわかるでしょ？ あなたのやってるのがどれだけ間違ってるか。

ナミ ……。

ヤマト ……そう。(ナギサを叩く)

ナミ ちよつと、……なにするのよ。

ヤマト しようがないからわたしが叩いてあげたの。あなたほどじゃないけど、わたしだ

って見ず知らずなわけだから。(叩く)

姉 逃げないのよ。

ヤマトは姉に押さえつけられたナギサを執拗に叩く。

ナミ あんたたちおかしいんじゃないの？

姉 ……正しいことをするの。

ヤマト 本当はあなたがやるんだから。(さらに叩こうとする)

ナミ やめて！

間。

ヤマト ……まあ大きな声。

姉 おかしいのはあんたじゃない？

突然、ナギサが呼子笛を吹くと、走って逃げた。
姉とヤマモトはそれを追いかける。

姉 あ、ちよつと、・・・待ちなさい！
ヤマモト お姉ちゃん！

間。波の音。
取り残されるナミ。

ナミ ・・・どうなってるの？ わたし・・・。

ナギサが走り込んで来る。

ナミ ・・・シオくん？

ナギサ (首を振る)

ナミ 違うの？

ナギサ ぼくの書いた劇、面白い？

ナミ きみの？・・・。

ナギサ 浦島。僕が中学の時に書いた。

ナミ え？

ナギサ ナミが演じたらどうだったろうか？

ヨウにそっくりな魚屋の娘が現れそこは魚屋に。
波音消える。

魚屋の娘 いらつしやいませ。

ナミ え？

魚屋の娘 やだわかった！・・・あなた。渚くんの彼女でしょ。

ナミ ・・・はい？

魚屋の娘 すごいでしょ、どうして分かったと思う？

ナミ ・・・。

魚屋の娘 渚くんのおばちゃんから聞いたのよ。渚くんが都会で綺麗な年上の彼女作ってき

たつて。お魚買いに来てくれたの？

ナミ どうしてこんなこと思い出すんだろう？

魚屋の娘 カツオの美味しいのが入ってるから買っていきなさいよ。

ナギサはしばらく二人の会話を聞いていたが、いつの間にかいなくなっている。

ナミ ・・・魚屋さん。変わった名前、変わった魚屋さん・・・。

魚屋の娘 女優さんやってるんだってね。もうおばちゃん喜んでやって、みんなに言いふらしてる。あんまりおばちゃんが言うもんだからあなたがいつ来ていつまでいるのか、この辺の人みんな知ってるの。．．．それ太刀魚ね。おばちゃん煮付け上手なのよ。太刀魚の煮付けなんて食べたことある？

ナミ ．．．太刀魚。(少し移動して目の前にあるものを眺める)

魚屋の娘 それはアサリ。秋のアサリもいいのよ。

ナミ ．．．(また移動して)これ．．．、

魚屋の娘 それはカレールー。(ナミが移動するのに合わせて)．．．クレンザー．．．洗面器．．．メリット。

ナミ ．．．魚屋さんなの？

魚屋の娘 うちのお父さんなんでも置いちやうのよ。売れるんだから置いとけて言うんだけど、たまーにしか売れない。メリットなんかもうたっぷり埃かぶっちゃってる。

ナミ (埃をかぶったメリットを見せて) ほんとだ。

魚屋の娘 おじさんもね、あんなだけ喜んでるのよ。ほらわたし弟がモモギで働いてるでしょ？ おじさん人事課長じゃない？ モモギの．．．ほら総務部の．．．ね？

ナミ ．．．はい。

魚屋の娘 うちの弟経営なのね。だから部の宴会で聞かされるんだって。渚くんの彼女の話．．．小さい町。いやね。

ナミ ごめんなさい。わたし．．．あなたの名前．．．思い出せないの。

魚屋の娘 やだ。聞いてたの？ わたしのこと．．．ワタコ。でもみんなはタコって言う、魚屋の娘だからって。やんなっちゃう。

二人は笑う。

魚屋の娘 あなたの名前は？

ナミ チナミです。

魚屋の娘 チナミさん。ここには何しに来たの？

ナミ え？

魚屋の娘 この町に．．．当ててあげようか．．．結婚するからでしょ、渚くんと。そのご挨拶。

ナミ ．．．。

魚屋の娘 やっぱり当たった。わたしね、渚くんとは小学校から同じなの。ほら、家も近いでしょ？ 小さい頃からよく一緒に遊んでて。

ナミ そう。

魚屋の娘 そ。渚くん高校でたら都会に出ちゃったからそれからは会わなくなっちゃったけどね。わたしはずっとここだから．．．ねえ。この町ってどう？

ナミ どうって？

魚屋の娘 田舎でしょ？ 住んでる人もモモギの人ばかりだし。狭いのよね、世間が。なんか妙に家族みたいにまとまっちゃって。

ナミ 嫌いなもの？ この町のこと。

魚屋の娘 町中が家族みたい、っていうとんだかいところみたいけど。それでもない

のよね。

ナミ わたしは好きですよ。

魚屋の娘 そうなの？ どの辺が？

ナミ 波の音が聞こえるところ。

魚屋の娘 そうよね。だってあなたチナミさんだもんね。

ナミ それ関係あるかな。・・・渚さんの生まれた町だし。

魚屋の娘 やだオノロケ。やけちゃうなあもう。この町で暮らすの？

ナミ ううん。

魚屋の娘 都会で暮らすんだ。

ナミ そんなに都会でもないのよ。

魚屋の娘 そうだ。知ってる？ 渚くんこの町出る時ノート作ったんだよ。俺が捨てるこの

町のこと、忘れないようにノートに書いておくんだって。何日もこの町うろろして

ね、地図を書いて、そこに思い出を書いたの。小学校の時におぼけを見た海岸とか、

犬に噛まれた路地、浜辺で不思議なおばさんに話しかけられたこと、中学校の文化祭

で演劇の台本を書いたこと、

ナミ え？

魚屋の娘 ・・・どうかした？

ナミ いや・・・、なんでも・・・、

魚屋の娘 そう。あとね、小学校の周りをうろつく変な女の名前がチャポンだったこと。

ナミ あ。

魚屋の娘 そう呼ばれてる人がいたの、小学校の周りに。もちろん私たちの勝手な呼び名だ

けど・・・。

ナミ それって記憶売りのチャポン？

魚屋の娘 やだ、聞いた？ 渚くんから。

ナミ 聞いたことがある。記憶を売り歩く変な女がいたって？

魚屋の娘 そう。変な人だったあ。今何してるのかしら。・・・まあそんなのをいろいろ細か

い字でびっしり書き込んだノート。すごい情熱だよ。たかが大学行くくらいでさ。

もう二度と帰って来ないみたいな覚悟で作ったノート。

ナミ ノート・・・。(何かが思い出されそうな感覚)

魚屋の娘 渚くんって、あんまり喋らないくせにそういう秘めたる情熱持ってるのよねえ。

ナミ 変わらないのね、昔から。

魚屋の娘 そうよ。考えてみれば小学校の頃からそうなんじゃない？ 無口で頑固。それを

言ってくればいいのに、っていう事を言わずに飲み込んだりよね。だからとい

って納得したわけじゃなくて、黙って不機嫌になってるの。

ナミ ・・・わかるわあ。

魚屋の娘 だからきつとそのノートも、きつと何かを飲み込んで不機嫌になって書いたんだ

わ。この町に対する何か。大げさよね。あーあ。でも本当にそうなっちゃった。・・・

渚くんはこの町を本当に捨てちゃうんだ。・・・あーあ。・・・わたし渚くんのこと好

きだったんだなあ。・・・好きだったのよ。

ナミ ・・・(ポツリと) どうしてこんなこと思い出すんだろう。わたしもうおばちゃんなの

に。

魚屋の娘・・・わたしもこの町出ようかな、なんて。渚くんみたく。
ナミ・・・出るのよ、やがて。

魚屋の娘 出ないよ。わたしはこの先ずーっとこの町にいてこの魚屋でこの町の人に魚を売
って過ごすの。

ナミ・・・あなたはお嫁に行つてこの町を出たつて聞いたわ。

魚屋の娘・・・あなた、わたしの未来を知ってるのね。

ナミ ほんの少し。

魚屋の娘 じゃあ教えて。この店はその時だれが見てるの？

ナミ・・・無くなつちやつたんだつて。

魚屋の娘 じゃあわたしも捨てたんだ、この町を。

ナミ 捨てたわけじゃないでしょ。

魚屋の娘 そうね。捨てられたのはわたしだ。わたしや渚くんだ・・・その頃のわたしは幸
せかな？

ナミ ごめんなさい。それはわからない。

魚屋の娘 もう少し聞いていい？

ナミ どうぞ。

魚屋の娘 結婚つてどんな感じ？

ナミ え？

魚屋の娘 だつてわたし結婚するんでしょ？ どんな感じかと思つて。

ナミ さあ、

魚屋の娘 楽しい？・・・幸せ？・・・毎日ウキウキ？

ナミ あなたのご両親はどう？

魚屋の娘 あ、そつか。あの二人も結婚してるわけだ・・・（考えて）別に普通よね。

ナミ・・・そういうことじゃない？

魚屋の娘 楽しくもなく、幸せでもなく、ウキウキでもない。

ナミ だつて毎日そんなだと疲れちゃうじゃない？

魚屋の娘 確かにそうよね。毎日だもんね。普通の、毎日つてことか。

ナミ そうかもね。

魚屋の娘・・・なんか安心したかも。

ナミ 今度はわたしが聞いてもいい？

魚屋の娘 どうぞ。

ナミ 渚さんが中学の文化祭で書いた台本つて・・・、

魚屋の娘 あ・・・えーつとなんだつけな・・・、えーつと、

ナミ・・・浦島？

魚屋の娘 あ、そうそれよ。よく覚えてるじゃないの。

ナミ・・・どうしてわたしここに来たんだらう。

魚屋の娘 結婚のご挨拶でしょ？

ナミ そうじゃなくて・・・こんなおばちゃんになつて・・・今はもうない・・・この魚
屋にまた・・・、

魚屋の娘 きつと、なにかを忘れないようにじゃない？

ナミ なにかつてなに？

魚屋の娘 知らないけど、渚くんがノートを書いたように、何かを忘れたくないんじゃない？
ナミ おとうさんどこにいるんだろう？

魚屋の娘 ……おとうさんってわたしの？

ナミ 違うの、(笑って) 渚さんのこと、わたしがそう呼んでて…、
魚屋の娘 やだオノロケ。いいわ。渚くんがいる場所、またわたしが当ててあげる。それは
ねえ。波の音が聞こえるこの町のどこか。

波の音が大きくなり、消える。

と、そこは海辺の公園。

劇団員たちはナミを大きく囲むように立っている。

ハマ ……どうしたの？

ナミ ……え？

ハマ どうしたのよ。なんかブーツとしちゃって。

ナミ あれ…。

ヨウ ……聞いてた？ わたしの話。

ナミ ……ヨウさん？

ヨウ ……なに？

ナミ ……わたし、今なんか…、

ハマ どうしちゃったのかと思っただわよ。

ナミ ……なんか…、いろいろなことが起きたような気がして…。

ハマ お疲れだったかしら？

ナミ あ、いえ…大丈夫です。

ミズ 急に黙りこくっちゃうからどうしたのかと思った。

ナミ ……すみません。

ヨウ で、聞いてた？ わたしの話。

ナミ あ、えっと。

ヨウ 明日がお祭りで、お祭りには町の人がみんな来るから、ダンナさんこの町にいるなら
きつと来るんじゃないですか？

ナミ あ…。はい…それは(聞いていました)。

ヨウ だからさ、出てくださいよ、わたし達のお芝居。

ミズ この子が言った通りお話は私たちが進めるから。ただついてくるだけで。

ナミ この町の昔話…、

ミズ そ。

ナミ それってどんな話なんですか？

ハマ ……あ、乗り気になってきたかな？

ナミ いや、そういうわけじゃないんですけど、ちょっと気になったから…。

ミズ お姉さんを亡くした少年が、その姉に会いに行く話があるんだけど。それをちよつと
アレンジしてるのよ。

ハマ その少年がこの子(シオ)。

ナミ 会いに行く…。

ヨウ そう、それにわたし達もついていくの。
ミズ 簡単でしょ？

ナミ どこに……会いに行くんですか？

シオ 竜宮。

ヨウ 即興劇のルールを知ってる？

ナミ はい？

ヨウ ルール、即興劇の。

ナミ ……さあ……。

ヨウ 相手を否定しないこと。なにがあっても。さあ、はじめましょう。

ナギサ、姉、ヤマモトが駆け込んでくる。

先ほど逃げたナギサを二人が追いかけてきたらしい。姉とヤマモトは息が上が
り、その場にしゃがみこんでしまう。

ナギサが呼子笛を吹く。

ナギサの笛が止むと、ヨウが死んだ姉となり、舞台奥の方でこちらを向いて立
っている。

死んだ姉 いらっしやい。

ナギサ ……ついたよ。

ナミ ……どこに？

ナギサ 「くらいところ」……。

ナミ 「くらいところ」？

ナギサ その入り口。

姉 あなたまだそんなこと言って（ナギサを叩こうと）。

ナミ （それを制するように） どういうことですか？

姉 ……笛を吹くとしー姉ちゃんがいる「くらいところ」に行けるって……。

ナミ くらいところ……。

姉 そうなの。あるはずもない事。

ナミ ……でも今、声が。

姉 え？

死んだ姉 ……いらっしやい。

ナギサ しー姉ちゃん。（死んだ姉の方を向こうとするが）

死んだ姉 見ないで！ ……そのままです。

ヤマモト ……しーちゃん？ ……あなたしーちゃんでしょ……ねえ。

死んだ姉 振り返らないでね。わたしの方を見ないで。

姉 あなた……。

死んだ姉 約束できる？

姉 ……ええ。

死んだ姉 会いに来てくれたのね……ありがとう。

姉 しーちゃんどうしてあなた……ここに……信じられない。

死んだ姉 ナギサが笛を吹いてくれたから、ここに来られたのね……ありがとう。

ナギサ うん。

姉 ……生きてたの？ ……生きてたのね。ここどこなの？ ……どうしてたの？

死んだ姉 「くらいところ」。ここはここで多くの神様が暮らしている。

姉 神様？

死んだ姉 そう、神様。

姉 さあ、……帰りましょう。あなたの荷物そのままにしたのよ。一緒に帰ってまた一緒に暮らすの。……こんなことあるとは思わなかった。……長かったわ。とっても長い時間だった。……さあ、

死んだ姉 振り向かないで。……お姉ちゃん。……そう、とっても長い時間が流れたの。

長い、長い時間。

姉 まるで時間が止まったみたいだった。でも本当によかった。さあ、行きましょう。…

早くこっちへ来て、わたしにその顔を見せて。……ね？

ヤマモト (姉に) よかったわね、あなた。

姉 ええ、信じられないわ。

死んだ姉 長い時間……。

ヤマモト ……大きいお姉ちゃんはね、とつてもしっかり家を守ってたのよ。そりやもう、

周りで見ているわたしも辛いほど一生懸命……、

死んだ姉 長い時間……。

ヤマモト そうよ。お父さんも、お母さんも、あなたもいない家を。……小さいナギサくんを守るために必死にやっていたの。よかったわねえ。よかったわよ。

死んだ姉 ……もう少し早ければねえ。

姉 ……どういうこと？

死んだ姉 本当に、もう少し早ければ……。わたし、行けないのよ。

姉 どうして……？

死んだ姉 わたしは、もうこの、「くらいところ」の火で炊いた食べ物を口にしてしまったの。

だから、もはやそちらには行くことができないの。

姉 どういうことよ。

死んだ姉 そう決まっているの。

ヤマモト そんなの、……きつとなんとかなるでしょう。

死んだ姉 ならないの。

ヤマモト なるわよ、

死んだ姉 「くらいところ」の神様がそう決めたのよ。

姉 ……なんなの？ それは。

死んだ姉 でもね安心して……私たちはね、こうして会おうと思った時、この入り口の坂道でこうしていつだって話ができる。だから何の心配もいらぬの。安心していいのよ。

姉 わたしそんなの信じないから。

死んだ姉 でもだって、そうなのよ。

ヤマモト そうだ。逃げちゃいなさいよ。

死んだ姉 逃げる？

ヤマモト そうよ。逃げるの。その、神様に見つかからないように、そっと、私たちと一緒に、

こつそり抜け出せばいいのよ。

死んだ姉 無理。この道をわたしはあと戻る事はできないから。

ヤマト じゃあお願いしたら神様に。

死んだ姉 そんな。

ヤマト ・・・なに？

死んだ姉 言えるわけがないわ。

ヤマト きつとあなたが一生懸命話せば聞いてくれるわよ。

死んだ姉 ・・・。

ヤマト お姉ちゃんはね、本当に必死で頑張ってるのよ。

死んだ姉 でも・・、

姉 ねえ、・・聞くだけでも聞いてみて。でないわたし、納得できない。ようやく少しずつ分かってきたのに・・この子なんかもつとつらいのよ・・あなたが聞いて、それで事がはつきりすれば、私たちもまた歩み出せる・・長い時間だったのよ。途方もなく長い時間わたしたちの方も暗闇の中をさまよっていたの・・ね、お願いだから、・・これではつきりさせましようよ。でないとまた、この子は笛を吹きつづけて・・、

死んだ姉 ・・・お願いしてみるわ。

死んだ姉は去る。足音が聞こえる。

ヤマト (姉の肩を抱き) お姉ちゃん・・。きっと大丈夫よ。だってあなたが頑張ってるもの。報われるわよ、きつと。

姉 ヤマトさん、ありがとうね。

ヤマト (ナミに) ねえ、あなたもそう思うでしょ？ もう二度と会えないと思っ
ていて、そういうことってあるわよね。

ナミ ・・・ええ。あると思います。

ヤマト そうよねえ。

ナミ そうでもないときれいじゃありませんから。

足音がして、死んだ姉が戻る。手にナミのトランクを持っている。

死んだ姉 お姉ちゃん、ナギサ。

姉 ・・・どうだったの？

死んだ姉 ダメだった。

ナミ え？

姉 ・・・そう。

ヤマト どうしてもダメなの？

死んだ姉 そう決まっているって。

姉 ・・・そうよね。

ナミ ダメなんですか？

死んだ姉 ええ。

ナミ 絶対に？

ヤマモト ねえ、どうにもならないの？

姉 ……うん。ありがとう。大丈夫よ。……これではっきりしたから。

ヤマモト でも、

姉 いいのよ、ヤマモトさん。……本当に、これで大丈夫。

死んだ姉 代わりにこれをあげる。わたしがいなくなっただけから見て。

姉 なに？

死んだ姉 玉手箱……。でもね、約束して。決して開けないでほしいのよ。

姉 開けない？

死んだ姉 そうしたら、もう私たちはここで会えなくなってしまう。……わかった？

姉 (思案の間) ええ。わかったわ。

死んだ姉 本当にありがとう。……じゃあ。……帰るね。

死んだ姉はトランクを地面に置く。

間。

姉 ……あなた。……帰ったの？ ……ねえ。ヤマモトさん、

ヤマモト なぁに？

姉 見てくれない？ なんか、わたし、……怖くて。

ヤマモト わたしも、怖いわ。

姉 ……チナミさん、お願いできる？

ナミ わかりました。

ナギサ ぼくが見る。

ナギサは振り返る。死んだ姉とナギサの目が合う。

姉 どう？

死んだ姉 (首を振る)

ナギサ ……いる。……いるけどちがう人だ。

姉 え？

ナギサ あれはしー姉ちゃんなんかじゃない。

死んだ姉 汚いでしょ？ ……海で死ぬってこういうこと。……だから見られなくなっ

たの。

死んだ姉は悲しい顔をし、そして去る。

姉、ヤマモト、ナミも振り返るがそこに死んだ姉の姿はない。

ナギサは呼子笛を吹く。そして死んだ姉の残したトランクを手にして、去る。

姉 ……ナギサ、ナギサ(それを追いかけて去る)

ナミ (トランクを見て) あ。……それ、

ナミも姉について行こうとした時、

チャポン いらっしやいませ。．．．いらっしやいませ。

ナミ ．．．はい。．．．ヤマモトさん？

チャポン 違いますよ。わたしはチャポンです。お呼びですね？ 記憶がお入用とかで。

ナミ ．．．あなたがチャポン？

チャポン ．．．何度か声をおかけしてもお答えにならないから、どうなさったのかと思いましたが。

ナミ いろいろなことが起きたような気がして．．．。

チャポン 随分深くまで潜ってこられたようですから、そりゃあいろいろなことも起こります。

ナミ そうですか。

チャポン で、どんな記憶をお好み。

ナミ 記憶を売ったり買ったりできるんですか？

チャポン (笑って) ここはお店屋さんですから、あなたが売ることではできません。あなたは買うだけです。

ナミ それは分かるんです。わたしが言いたいのは、その、記憶が物みたいに、．．．買ったりにできるのかっていう．．．、

チャポン そりゃ買えます。昔から人類は記憶を遠く離れた誰かに伝えるため、それを物にして活用してきたんです。文字などはまさしくそうですし、絵や写真もそうですし。

さらには楽譜などもそうですし、現在では音楽そのものを録音したり、映像を録画したりもできます。またそれを記録する媒体についても、昔は紙だったものが、今では電子の力を得て進歩し、大容量、小型化を果たしているのです。

ナミ ．．．なるほど、ね。

チャポン 遠く離れた誰かとは、地理的、時間的なものを含みます。そうして人類は、記憶を物として流通させてきました。理論上は地理的、時間的にどれだけ離れていようとも、記憶を届けることを可能としたのです。

ナミ それで、あなたはどんな記憶を売ってるんですか？

チャポン この町に関わる記憶ならなんでも。

ナミ なんでも？

チャポン はい。そうやって生計を立てていますから。

ナミ そうなんですか。

チャポン ええ、とにかくわたし達は何もかも忘れてしまいますから。．．．あとは、いけない写真やビデオなども売ってますが、それはお店の方で。

ナミ いけないビデオ？

チャポン はあ、そちらがお好みで？

ナミ ．．．いえ。．．．なるほど。そうやって生計を．．．。

チャポン もしそちらにご興味がおありなら、ぜひお店にいらしてください。お店の場所は、モギの住宅の裏手に神社がありますが、その裏路地を入ったところに飲み屋街があります。そのずつと奥にありますので。．．．いらっしやいますか？

ナミ ．．．遠慮しときます。

チャポン お店の営業は夜しかやっておりませんので注意が必要です。

ナミ 大丈夫ですから。でも今きつとそこはもう、取り壊されて公園になってるはずよ。

チャポン (笑って) まさか。

ナミ この町は大きく変わったんです。

チャポン そう……。ところであなたはどのような記憶をご希望で？

ナミ それは……。この町に関わる……。記憶の……。その……

チャポン ……ええ、ええ。それはもうご覧になってますよ。わたしがサービスしたので
す。

ナミ ……もう？

チャポン ……ほら、たとえばあそこで今、男の子が泣いている記憶。

チャポンは耳をすます。ナミも聞いてみるが何も聞こえない。

ナギサが現れる。同時に鬼火がひとつチラついた。

チャポン 犬に噛まれて泣いているのですよ。かわいそうに。でも悪いのは男の子の方です。

ナミ (何かに気づいて) ……犬に石を投げたんですよね。

チャポン そうです。ほら記憶。もう一度耳を澄ましてご覧なさい。また別の日、その男の
子に浜辺で声をかけるおばさんがいます。

ナミは耳を澄ますが、やはり何も聞こえない。

また別の鬼火がひとつ、チラつく。

チャポン 漁で夫と息子を同時に亡くしたおカミさんが、物乞いをしているんです。男の子

はなけなしの小遣いをそのおばさんにあげました。

ナミ それでお父さんに怒られたの。そんなおばさんの言うことを信じるなって。

チャポン でもお母さんはそれをかばうんです。

ナミ そう。本当かもしれないじゃないのって。それで夫婦喧嘩になって、男の子は困っち
やった。

チャポン そう……。これはあなたの欲しい記憶だったでしょう？ ご満足いただけまし
た？

ナミ ……ええ。

チャポン 喜んでいただけただけで何よりです。

ナミ これは、わたしのいなくなつた夫の、忘れたくなかつた記憶……。でもどうして、

チャポン あなたの旦那様の記憶は、今や完全に物となつたので、わたしが取扱えるのです。

ナミ 記憶が……。物に？

チャポン 昔から人類は記憶を遠く誰かに伝えるため、それを物にして活用してきたんです。

ナミ ……わたしは、いなくなつてしまった夫を探して、この町に来たんですけど。

チャポン はい。

ナミ ここに来てるんじゃないかと思って。

チャポン わたしが取り扱うのは記憶だけです。ですからあなたの旦那様がどこにいるかは
知りません。

ナミ そうですよね……。でも、
チャポン でも？

ナミ わたし、夫がどこにいるか分かったかもしれない。

チャポン ……どこに？

ナミ 夫は、……物になってしまった、かも……。

チャポン ……それを知るためには、もっと深く潜る必要がありますね。

ナミ もっと深く……。

チャポン ここよりもっと深く。もっと深く潜るため、歌を歌いましょうか。

ヨウ、ハマ、シオがいつの間にか現れて演奏が始まる。

と、鬼火は消えてしまう。

「あめあがり」

あめあがり みずたまりは

かがみ みたい

あめあがり みずたまりに

くじら もようの

そらが うつつてた

あめあがり みずたまり

あめあがり くじら

みずたまりの なかを もぐって

ちきゅうのうらまで つれてけ

歌い終わると、ミズ、ヨウ、シオが一斉にナミの方を向く。

ミズ ハマさん……見つかっただんですか？

ハマ チナミさん。ウチのお客様ただけだね。昔お芝居やってたんですって。女優さん。

ミズ まあ（ヨウ、シオと顔を見合わせて喜ぶ）。

ナミ え……？

ハマ あら、どうかした？

ナミ なんだか、いろいろなことが起きたような気がして。

ハマ ……そう。こちらミズキちゃん。

ミズ ミズキです。

ハマ みんなはねえ、ミズって呼んでるのよ……ヨウコちゃん。

ヨウ ヨウコなので、ヨウって呼ばれてます。よろしくお願いします。

ナミ はあ……。

ハマ あ、そうそうわたしはハマ。シヨウジハマコっていうのよ。往年の銀幕スターみたいでしょ。名ばかり大女優。やんなっちゃう。というわけでわたしはハマコでハマ。そ

れでこの子がトシオくん。ニックネームは、シオ。

ナミ ……おとうさんでしょ？

ハマ ……シオよ？

ナミ 違う、この子はおとうさんでしょ（シオに詰め寄る）

ヨウ ちよっと、どうしたんですか。

ナミ（シオに）どうしてここにいるの。……急にいなくなったと思ったら、……こんなところで、

ヨウ ちよっと、チナミさん？

ナミ（シオに）おとうさん！

ハマ チナミさん！

ナミ ……あ。

ハマ ……大丈夫？

ナミ ……あ、わたし、……その、やだ……、どうしちゃったんだろう……。

ハマ 本当に大丈夫？

ナミ すみません、わたし……、ちよっと、

ハマ どうしちゃったの。

ナミ なんだか、その……。

ミズ じゃあ説明しますね？

ナミ え？

ミズ 即興劇のルールを知ってます？

ナミ いや、あの、

ミズ ルール、即興劇の。

ナミ ちよっと、

ミズ 相手を否定しないこと。なにがあっても。さあ、はじめましょう。

ナミ ちよっと待ってください、わたしできません。

トランクを持ったナギサを追いかけて、姉とヤマモトがやってくる。

姉 ナギサ！ 待って。

ナギサ（止まる）

姉 つらいものを見たわね。……ごめんね、お姉ちゃんが臆病になったばかりに。

ナギサ（首を振る）

姉 ううん。わたしが悪いの。全部わたしの臆病な心が……。わたしがいつまでも忘れられないからあなただって笛を吹くのよね。……ごめんね。……（長い間）あの夜、あの子に最後に会ったのはわたしだった。……あの子が海に行くのを止められたのはわたしだった。どうしてあの子を止められなかったのかと、そう思うたびわたしの心は苦しくなり、何もわからないあなたが笛を吹けば、その苦しい心はわたしを締め付け、気がつけばあなたをぶっていたの。……わたしが臆病だから。……わたしが臆病なばかりに。……ごめんね、ごめんね。

ヤマモト そんなことない、あなた一生懸命やってるじゃないの。

姉 わたしはあの子に何もしてあげられなかった。わたしはこの子にも何もしてあげられ

ない・・・。(と自分をぶつ)

ヤマト (それを制して) 違う・・・違うからね。

姉 ……だから開けましょう。

ヤマト ……え？

姉 玉手箱。

ナミ あの、それは、

姉 こんなものがあると、わたしはまたあの子に会いに行ってしまう。この子だって、いつまで経ってもあの子を忘れることができない。

ヤマト ダメよ。だってしーちゃんそう言ってたじゃない。

姉 だから開けるの。

ヤマト しーちゃんが悲しむわよ。

姉 お願いヤマトさん、そうさせてちょうだい。

ヤマト ダメ。(ナミに) ねえ、あなたからも言ってみてちょうだい、開けちゃダメだって。

ナミ え、

ヤマト この人に開けちゃダメだって言って。

ナミ え、だからわたし、

姉 何言ってるの。(ナミに) 開けてもいいでしょう？

ナミ いや・・・、

姉 言ってみてちょうだいよ、開けてもいいって、

ナミ わたし本当に、

姉とヤマトはトランクを取り合う。

ヤマト いいわけないわよね。

姉 いいに決まってるじゃないの。

ナミ あの・・・あの、

姉 否定しちゃだめなの！ 教えてあげたでしょう？

ヤマト こっちだって教えたでしょ！

ナミ ちよつと待ってください。

姉 否定したら台無しなの。

ナミ ミズさん、ハマさん。待ってくださいって、

ヤマト 否定しないの！

ナミ これは！ (二人からトランクを奪い取って抱え)・・・わたしのトランク！

ナギサが呼子笛を吹く。

と、そこは旅館。

ヤマトとナギサはいなくなり、女将が立っている。

柱時計が二時を打つ。

女将 ……なんですか？

ナミ いや、えっと・・・、大切なものなので。

女将 ……取りやしませんよ。

ナミ うそ！ 取るじゃない。

女将 お預かりするだけです。（手を差し出す）

ナミ やめてよ。（拒む）

女将 信用してくださいな。（取ろうと）

ナミ わたしからこれを取り上げないで！

と、ナミがトランクを引っ張った拍子に蓋が開き、中から古びたノートと、黒ぶちの眼鏡、そして着替えや洗面道具など宿泊のための用具、喪服が落ちる。

音楽と、波の音がして、

パレードの人々……それはヤマモトさんと死んだ姉とナギサが……出てくる。

女将も姉となってそれに加わる。

死んだ姉 ……（ナミに）開けてしまったのね。……ノート、……（開き）地図と、小さな文字がびっしり。黒ぶちの眼鏡……。 （ナギサに）これでこの人の頭の中の「くら」ところ」は消えちゃったの。

姉 じゃあこの子はもう、笛を吹かないでも……、

死んだ姉 ええ。そんなことしなくていいの。

ヤマモト しーちゃん、これでよかったの？

死んだ姉 もちろんよ。（ヤマモトにうなづいて見せる）

パレードの人々がフロートを引いて去ろうとする。

ナミ （ノートを見せて）……これ。

パレードの人々はナミを振り返る。

ナミ ……夫が少し回復したような時、これが見たいって頼まれたの。地図なんですけど、夫が高校生の時に書いたんです、生まれ故郷の思い出さうで……。結局、容体が悪化して、息をひきとる寸前までそれを見ていました……。お棺に入れてあげようと思っ

ヤマモト （ナミがトランクに蓋をするのを手伝いながら）留め具が外れたのね……。じやあ私たち、行くわね。

波の音がする。

ナギサを残しパレードは去る。

そこはナミの家。電灯のペンダントが一つ下がっている。

深夜、だともう明け方にほど近い時間帯である。

ナミはきつと、ずっとそこにいたのだらう。

電灯のペンダントを中心に鬼火が辺りをちらついている。

ナミ (ぼんやりと語りかけるように) おとうさん・・・、おとうさん・・・。

ナギサ なに？

ナミ (聞こえない) おとうさん・・・、

ナギサ なに。

ナミ (聞こえない) 急にそっちに行っちゃって、ひどいね。

ナギサ ……。

ナギサが鬼火にひとつひとつ触れる。触れるたび鬼火は消えてゆく。

ナミ おとうさん。

ナギサ ……。

ナミ ……そっち行っちゃっても無口のままなの？ ……そっちにも秋が来た？

風邪

ひいてない？

ナギサ ……。

ナミ おとうさん。・・・おとうさん。

ナギサ ……。

ナミ ……わたしと一緒にになってよかった？ あの町を捨てて、あの町に捨てられて、・・・よかった？ ……本当は魚屋の娘さんと一緒になればよかったって思ってた？

ナギサ ……。

ナミ わたしがそっちに行つた時に教えてね。わたし、とても深いところに潜つて、いろいろなところへ行つたのよ。あなたの歩いた道。あなたと歩いた道。・・・そのお話もしましうね。・・・約束。

ナギサが呼子笛を吹き、それを投げ捨てる。

波音が聞こえる。

ナミ ……え？

今、ナミには渚の姿がはっきりと見えているが、観客には少年ナギサが見えて
いる。

渚 今なにか言いたくなつただけど・・・、

ナミ ……うん。

渚 ……ナミ、ほら、

ナミ ……え？ 何？ ……何を見るの？

渚 ……朝。もうじき明るくなる。

音楽。

薄明るい東の空からゆつくりと朝日が昇る。

朝日に照らされて、並ぶ二人。
無口な渚はそれきり何も喋らない。
渚はナミの手を握る。
ややあつて、
渚がくらいところへ去ってゆく。
二人の手が離れる。
渚は行く。
ナミはそれを見る。
窓から差し込む朝日が、たった一人のナミを照らす。

了